

聖書：使徒 1：12～26

説教題：聖霊を待つ準備

日時：2013年5月12日

イエス様は復活してから 40 日間、弟子たちと共にいて、ご自身が生きていることと神の国について教え示されました。そして聖霊についてこのように約束されました。8 節：「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」そうして彼らが見ている間に、イエス様は雲に包まれて天へと昇って行かれました。さてその後で弟子たちはどうしたでしょうか。次の 2 章でいよいよペンテコステの約束が成就しますが、その日に備えて彼らが準備をしたということが今日の箇所に記載されています。

まず彼らがした一つ目のことは、みなで心を合わせ、祈りに専念したことです。彼らはイエス様から「エルサレムを離れないで、父の約束を待ちなさい。」と言われた通り、エルサレムに入り、いわゆる 2 階座敷で祈り始めました。その人々の名前が 13 節から記されています。まず書かれているのは、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダを除く 11 人の使徒たちです。さらにそこには婦人たちもいたと記されています。そして注目すべきは 14 節に「イエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たち」とあることです。福音書に書かれていた時のイエス様の家族たちは、イエス様を信じるグループには必ずしも入っていませんでした。ヨハネの福音書 7 章 5 節：「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」しかし今やその彼らも使徒たちと共に、イエス様を信じる共同体を形成していたのです。15 節には、120 名ほどの兄弟たちが集まっていた、とあります。

この人たちはどんな姿を示していたのでしょうか。二つのことが書いてあります。一つは「みな心を合わせ」ということです。少し前の弟子たちは、何かあるとすぐに争っていました。この中で誰が一番偉いかと論じ合い、互いに互いを自分の足の下に踏もうとしていました。ところがそんな彼らがここで心をつ一つにして祈っていた、とあります。ヨハネの福音書 17 章には、イエス様が十字架にかかる前夜に祈られたいわゆる大祭司の祈りがありますが、その中でイエス様は「彼らがつ一つとなるためです。」と祈られました。まさにその美しい一致が、この心を合わせて一つ思いで祈る姿に実現し始めていたのです。

もう一つは「祈りに専念していた」ということです。新共同訳聖書は「熱心に祈っていた」と訳しています。すなわち取り組んだもののすぐにやめてしまうような祈りではなく、持続性のある、粘り強い、集中する祈りをしていたのです。祈り始めたかと思うとすぐに眠りこんでしまったかつての姿とは大違いです。

一体このような祈りへと彼らを突き動かしたのは何だったのでしょうか。それは復活の主が与えてくださった偉大な約束でしょう。イエス様は、もう間もなくあなたがたは聖霊のバプテスマを受けると言われました。その聖霊を受ける時、あなたがたはエルサレムから始まって、

地の果てまで神の国を伝える大使となると言われました。弟子たちを見つめる限り、そこには何の望みも力もないけれど、聖霊を頂くことによって、彼らは世界の果てまで神の国を宣べ伝えるという途方もない仕事を遂行して行く者たちとなる。この素晴らしい約束を受け止める者たちは、どのように応答することがふさわしいのでしょうか。神が上からの恵みを持って導いてくださるからと言って、何もしないでただ待っているのが正しいのでしょうか。むしろ私たちはここに、神が一方的な恵みをもって導いてくださることを本当に待ち望む人は、その主権を持つ方に祈りをもってより頼むのだということを見ます。神の恵み深い「約束」と私たちの「祈り」とは一緒に進むのです。

私たちは自分の祈りを振り返ってどうでしょうか。ともすると私たちが祈りを軽視してしまいやすいのは、祈りはあまり効果的ではないと心の底では思っているからではないのでしょうか。祈るより、何かのために動いた方がもっと効率的だと思いやすい。しかしこれは言い換えれば、主の主権を正しく信じていないということではないのでしょうか。主が主権を持っているのではなく、私がかかなりの部分の主権を持っていると思込んでいるので、私たちはまず自分が動くのです。しかし主権を持っておられるのは主であり、主こそ一切のカギを握っておられるお方だと私たちが考えるならどうでしょう。そう考えるなら私たちがする最初のことは「祈り」ではないのでしょうか。そのことの方がはるかに重要であり、誤解を恐れず言えば最も効果的なことだと思ふ。ですから私たちがあらゆる行動に先立ち、まず手を休めて祈りに向かうかどうかは、私たちが正しく神の主権を仰ぎ、信頼しているかのバロメータになることと言えます。そういう意味で、この時の弟子たちがまず祈ることへと進んだのは、ふさわしい応答でした。また彼らが熱心に祈り続けたのも、主の約束への信頼によることでした。もう間もなく聖霊を受けると言われた彼らは、いつそのことが起きるかは知らされていませんでした。最初の一日は祈り続けても、二日、三日、四日、五日と立つ間に、その心が続かなくなることも人間的には十分に考えられるでしょう。しかし彼らは主の約束に立った時、祈り続けることができたのです。私たちの祈りに燃料を補強するのは私たちの熱心とか私たちの決心ではなく、主の約束です。その約束が私たちに祈りの粘り強さを与えるのです。そしてその祈りを通して、私たちは恵みを受けるにふさわしい者へと整えられることになるのです。

聖霊降臨を待つ彼らが見せたもう一つの準備は、御言葉との取り組みです。15 節以降でペテロは集まっていた人々に聖書を根拠にして、あることを語ります。考えに入れて良いと思われることは、次の2章のペンテコステの説教においてペテロが旧約聖書のヨエル書を引用することです。どうして彼はそのことができたのでしょうか。それは、もう間もなく聖霊があなたがたに注がれるとイエス様が語られるのを聞いて、聖書が聖霊について何と語っているか、弟子たちがもう一度学び直していたからではないのでしょうか。また、弟子たちは復活の主によって聖書を新しい光の下で読むように導かれました。旧約聖書は律法も預言者も詩篇も、キリストを指し示していたことを教えられました。その光の下で、特にメシヤに関する預言をもう一度読み直していたところから、ペテロは使徒補充の御心を悟るに至ったのだと考えられます。

ペテロは詩篇 69 篇 24 節と詩篇 109 篇 8 節を引用して、ユダの運命は聖書が預言するところであつたと述べ、ユダと交代する人が選ばれるべきであることを語ります。このように弟子たちはこの期間、ボーっと待っていたのではなく、祈ると共に、御言葉に学び、そこからさらに必要な準備をするように導かれたのです。

さてその使徒の補充についてですが、ここは最後にくじを引いたというエピソードが有名ですが、そこにだけ注目するあまり、それまできちんとしたプロセスが踏まれたことを見逃さないようにしなければなりません。まず使徒たちは適切な資格条件を上げて候補者をノミネートしました。その条件とは、ヨハネのバプテスマから始まって、主が天に上げられる日まで、行動を共にした者の中から、ということです。使徒の使命は 22 節後半にありますように、イエスの復活の証人となることです。ですからまず復活の主を目撃した人でなければなりません。またイエス様をより良く証しするため、それ以前のイエス様についても、行動を共にすることによって良く知っている人でなければなりません。その結果、二人の人が立てられました。一人はバルサバと呼ばれ、別名をユストというヨセフです。バルサバとは「安息日の子」という意味です。彼は安息日に生まれたからか、あるいは安息日をしっかりと守る人だったので、そう呼ばれたのでしょう。またユストとは「正しい人」という意味です。このようなニックネームを付けられるほどの評判の良い彼でした。一方のマッテヤについては特別なことは書かれていません。おそらく先の条件にかなうのは、この二人だけだったのでしょう。さてここまでは候補者を絞ることができて、これ以上はどっちが良いのか、決められません。そこで彼らは旧約聖書の伝統に沿ってくじを引きます。箴言 16 章 33 節：「くじは、ひぎに投げられるが、そのすべての決定は、主から来る。」その結果、選ばれたのは何とマッテヤでした。人間的な判断からすれば、バルサバと呼ばれ、別名ユストというヨセフの方が選ばれそうです。主の選びは往々にして人の考えと違うという実例をここにも見るができるかもしれません。こうし 12 使徒の組織が整えられて、いよいよ次章で見るペンテコステの出来事が起こることになるのです。

以上のように、聖霊降臨を待つ弟子たちは何もしないで待っていたのではなく、そのために準備をしていたというのが今日の箇所です。その準備とは祈りであり、御言葉の学びであり、また御言葉に導かれてのその他の準備です。もちろん私たちはこの箇所を適用する際、ペンテコステの出来事の独特性を考慮する必要があります。次回見る聖霊降臨は、エルサレム、サマリヤ、異邦人の地と繰り返されますが、それでワンセットの 1 回限りの出来事です。これは神の民の歴史の分水嶺に当たるような出来事であり、今日も繰り返されるような出来事ではありません。ですから私たちは次章で見るペンテコステと同じ出来事を今日も期待すべきではありません。むしろ私たちはすでにペンテコステの日に実現した祝福、すなわち聖霊が今や教会と共にあるという祝福の中に生かされています。そのことはわきまえつつも、私たちはこの箇所から、聖霊の働きは私たちの側の祈りや聖書の学びを必要なしとはしないことを知ります。むしろ祈りと御言葉を持って待ち望むことは、聖霊の豊かな働きを期待できる良き準備だとい

うことを知るので。これは私たちの祈りや聖書の学びが良い行ないとカウントされて、聖霊の働きを頂くという意味ではありません。使徒の働きが述べているメッセージは、ただ一方的な主の約束と恵みとによって、すなわち聖霊の働きを通して、これからのことが導かれて行くということです。これは自分自身の罪深さ、貧しさ、力の無さに悩む私たちにすべてにとっての希望のメッセージです。しかし、このメッセージを本当に感謝して受け止めるなら、私たちがするまず最初のことは、この主権者に祈ること、そしてその御言葉に聞き続けることです。一見地味なことですが、このことこそが聖霊の偉大な働きへとつながる素晴らしい準備なのです。私たちは改めて聖霊に信頼して、自分の人間的な力で動くのではなく、この恵み深い主権者に祈り、その御言葉に耳を傾けることを大切なこととしたいと思います。みなで心を合わせ、教会の働きと祝福のために、個人の働きと祝福のために、聖霊の導きを祈り求めたいと思います。ルカはイエス様の約束に続いてすぐにペンテコステの祝福を記さず、約束を頂いた弟子たちがこのように聖霊を待ち望んだことを書きました。彼はこうして、聖霊により頼む今日の私たちも、共に集まって心合わせて祈り、御言葉に聞く歩みを通して、この聖霊の豊かな働きにあずかることを期待できること、それが聖霊を待つ素晴らしい準備なのであるということを私たちに語っているのだと思うのです。